

食堂 これ正平九年十月、後村上天皇吉野の行宮より當山に行啓あり、其後十四年十二月觀心寺に遷らせ給ふまで六箇年の久しきに亘つて當山に留まれたる御時、此食堂をば假の政廳となし、補正儀、和田正武等をして常に軍議を凝らしめ給ひし、世に天野殿と稱する由緒ある建物である。

金堂 特別保護建造物。後白河法皇の御建立にかゝり、豐臣秀頼、徳川綱吉の修築したものである、堂内に安置せる本尊大日如來、脇士降三世明王、不動明王、共に運慶の作と傳へらるゝ名作で現に國寶である。

觀月亭 特別保護建造物、亭は今を足る約五百五十年前、後村上天皇當山に鳳輦を駐めさせ給ひし時、觀月の臺として建てさせ給ひしもので、檜皮葺の小臺である。

仲秋明月の夜、天皇御愛の琵琶を弾じつゝ、此山奥に御心を澄ませ給ひしかへと思へば、かの^{オモケ}爲忠朝臣の「君すめば峰にも尾にも宮居して、深山ながらの都なりけり」と詠まれたる歌と共に、そゞろ往時を追憶される。

右の外、御影堂、多寶塔、鐘樓等特別保護建造物に指定されたる立派な建物が數多くある。

沿線

狭山池

南河内郡三都村(河内中田驛ヨリ三町)

我國最古の池溝に屬するもの、一で、遠く崇神の朝「農天下之本原也、民所持以生也、今河内狭山埴田水少、是以其國百姓慮於農事、其多開池溝以寬民業」の詔に起因して、垂仁天皇の朝(一千九百餘年前)開鑿されたものである。其後、數百年を経て池底大に埋れたので、行基菩薩之を修築し、降つて片桐且元、秀頼の命を奉じて大修補を行ひ、徳川氏亦數次修補して今日に至つてゐる。池は周圍壹里餘、これが灌漑南河内、中河内兩郡内の五十六大字耕地面積二千町歩に及ぶ一大用水池である。

河内なる狭山の池のひろければ

稻葉かり積む舟も見えけり

上田秋成

(附) 狭山池を説く際、大阪府が、香川兵庫兩縣と共に灌漑水の不便なること、用水池の特に必要なる所以を知らしむること肝要である。尙灌漑水の不自由なるより、地下水の利用に腐心せること「はれつるべ」の河泉の地に林立せる有様よりして充分に知らしめればならぬ。

高野沿線記事引用書

皇陵、皇陵參拜の葉、大阪府全志、河南の葉
地名辭典、大日本人名辭書、日本百科大辭典

伊勢大廟方面

順路

- 一、(第一日) 山田驛——外宮——外宮域内別宮——外宮神苑——倉田山徴古館及農業館——宇治橋——内宮——内宮域内別宮——内宮神苑——二見浦(宿泊)(行程約二里半)
- (第二日) 二見浦與玉神社——夫婦岩——二見浦驛——鳥羽驛——日和山——無線電話局——樋の山——鳥羽港——鳥羽驛(行程約一里)
- 二、(第一日) 山田驛——外宮——外宮域内別宮——外宮神苑——倉田山徴古館及農業館——宇治——(宿泊)(行程約二里十町)
- (第二日) 内宮——内宮域内別宮——内宮神苑——二見浦驛——二見興玉神社——夫婦岩——二見浦驛——鳥羽驛——日和山——無線電話局——鳥羽驛(行程約一里十町)
- 三、(第一日) 山田驛——徴古館及農業館——内宮——内宮域内別宮——内宮神苑——朝熊山(宿泊)(行程約三里半)
- (第二日) 朝熊山——宇治——二見驛——二見興玉神社——夫婦岩——二見驛——山田驛——外宮——外宮域内別宮——外宮神苑——山田驛(行程約二里)

宇治山田市

三重縣度會郡

伊勢の東南隅に近く宇治と山田より成る。大廟所在地で世に神都と稱せられておる。山田には外宮、宇治には内宮を奉祀し、市街は兩神宮間一里半を連ねた丘陵を中心として發達した。御幸通をはじめ瀟洒たる街區は、全國より集ひ來れる參宮客を以て滿され、神都の氣が漲つてをる現住人口約四萬 (大正十一年末現在)

參考

大廟參拜者統計(兩宮衛士誌所調)

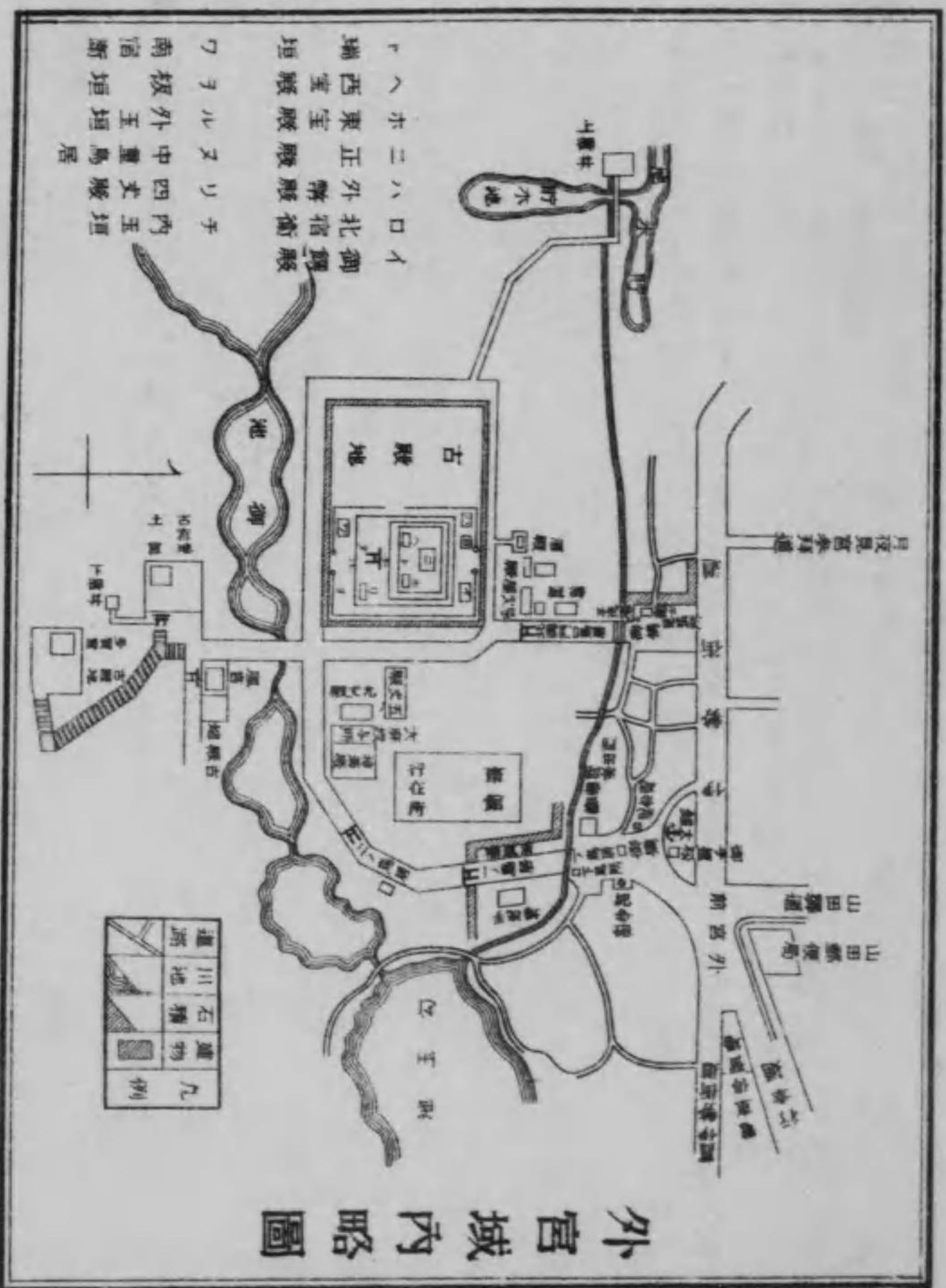
	内宮	外宮
明治45年	759835	854946
大正 2年	718847	841733
3年	732315	873234
4年	702241	846579
5年	722830	901779
6年	908094	1050697
7年	1029497	1183907
8年	1094400	1290356
9年	1097680	1283472
10年	1091928	1329195
11年	1205464	1414915

外 宮（豊受大神宮） 山田驛より東南三町

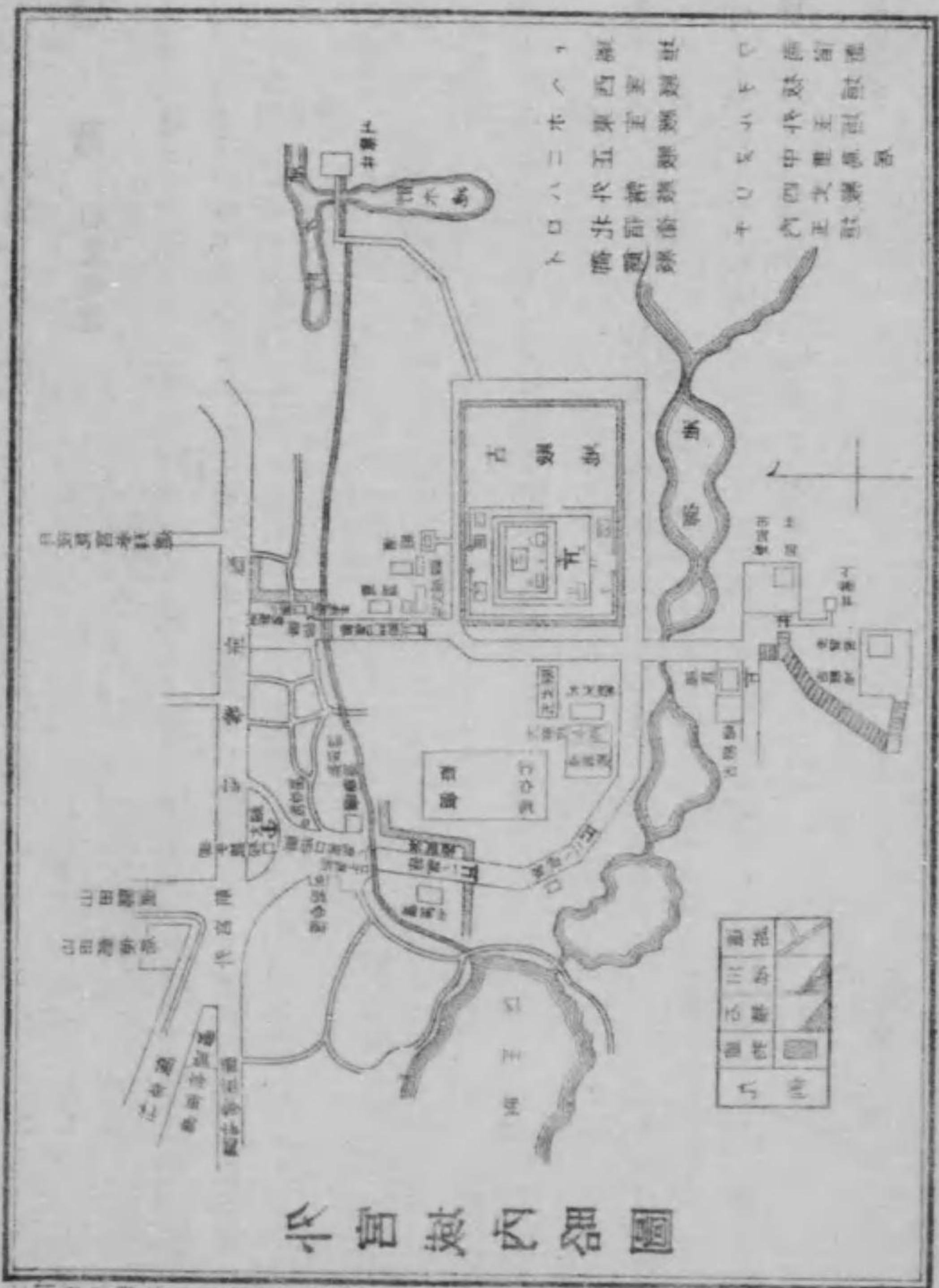
祭神 豊受大神

相殿に御伴神三座（東座 瓊々杵尊、西座 天兒屋根命、天太玉命）

豊受大神は、百穀魚獸を生み成し蠶糸を創造して衣食の道を開かれたので天照大神は深く之を御嘉賞あらせられ御饌都神と尊び、始めて稻種を天の狭田長田に植えさせ給ひ、養蠶の神業を始めて神衣を織らしめ給ふた。かるが故に天孫降臨の御時、天津日嗣の御爲と、天下蒼生に弘く恩頼を與へ給ふ爲に寶鏡に副へて豊受大神の御神靈を御授けになつたので、歴代、皇大神の御神靈と共に同殿に奉齋されたが、神宮の分立から丹波遷幸となつて吉佐宮に御留りになつて居たのを。雄略天皇二十一年十月皇大神が天皇の御夢に、『吾は高天原で見定めた大宮地に鎮り坐すが、吾一處だけでは甚苦しく思食され、大御饌も大御心安く聞食さず坐すから丹波國比治の眞奈井に鎮祭し奉つてある我が御饌都神豊受大神を我が許に遷祭し奉ることにしたい』と神誨があつたので、天皇大に驚かれて、度會神主の遠祖大佐々命に詔して豊受大神を迎へ奉らしめ伊勢度會の山田原に新宮を建て、御神靈を遷祭し奉り、皇大神の日別朝夕の大御饌を當宮から奉ることゝなつた。これ實に同天皇の二十二年九月（約一千四百年前）で皇大神宮御鎮



大阪府立総合資料館蔵
大正十一年発行



座以來四百八十一年の後であつた。

參考 外宮別宮

多賀宮

外宮正殿の南方一町餘の山上にあつて、豐受大神の荒御魂を奉齎してある。當宮は、外宮の第一別宮であるから、恒例、臨時の祭祀總て本宮と同日に行はれ、勅使發道の時は當宮に參向するを特例とする。

土宮

外宮正殿南方の山下にあつて、大土の御祖神を奉祀してある。祭神は山田原の地主神で宮川堤防守護の靈徳によつて、大治三年別宮に列せられた。

月夜見宮

外宮の北方宮後町にあつて、月夜見尊及同荒御魂を奉祀してある。

風宮

外宮正殿の南方山下にあつて級長津彦命、級長戸邊命を奉祀してある。此宮は弘安四年神威を顯はして十萬の元兵を海中に覆滅したので正應六年宮號を宣下され、後世外國襲來の難を祈禱されるには本宮と共に此宮にも祭祀を行ふを例とされた。弘安の神風とは即ち此祭神の卸威徳を稱へ奉るわけである。

外宮神苑

伊勢大廟方面

元神苑會の造成にかゝり内宮神苑と同じく明治二十二年の修營に起つて同二十六年完成し之を神宮に献納した。總反別四町餘。苑内に勾玉池ありて白蓮多く生じ數百の水鳥常に浮游して居る。又、今上陛下御手植松、征清記念砲及日本海軍捷記念大鐘等あつて花弄櫻楓松柏の景趣洵に壯麗である。

徴古館、農業館

山田驛より西十四町

倉田山上にあつて三萬坪の園地を有し徴古館には神宮寶物を始め上古の遺物、各時代の服飾器具、古文書、繪畫等を陳列して文物制度の變遷を知らしめ農業館には農林、水産、牧畜、工藝等に關する器具、標本、製作品模型、統計表を陳列して公衆の觀覽に供してゐる。

宇治橋

宇治公園（宇治橋外にある面積七千餘坪の公園。大正三四年の交三重縣の築造にかゝる）と神苑地との間を流る、五十鈴川に架けた大橋で總檜造りの長さ三百尺、幅二十六尺を有し兩岸に大鳥居を建て西方に鎮守の橋姫神社を奉祀してある。本橋古くは下流に架けてあつたのを永享年中足利義教の寄進により茲に移して堅固なる橋梁となしたので、爾來、内宮正遷宮の年毎に新橋を造

營して盛んな渡始式を行ふことゝなつた。

五十鈴川

水源は神路山及島路山から發して宮域内を通過し下流は二見に至つて伊勢海に注ぐ流域四里上流には大瀧小瀧の勝あり、又壺淵、鮑石、牛石、鏡石等の奇石所々に散在してゐる。一の鳥居を入つて、右方風の宮前の流れと鏡石の方の流れと落合ふところに手水場がある、この淵を川合淵といひ水清く參宮の時、こゝにて身を清める。

内 宮（皇大神宮）山田驛より東南一里十四町

祭神 天照大御神

相殿に天手力男神（東座）萬幡豐秋津姫命（西座）を祭り奉る。

天孫瓊々杵尊に三種神器を授け給ひしより以來、歴代の天皇は、神勅のまゝに皇居の御同殿に齋き奉られたが崇神天皇の御時、神威を恐れ給ふて別殿に奉齋する御事となり倭笠縫邑に磯

伊勢大廟方面

城の神籬を建て、御饌都神豐受大神の御神靈を副へ三種の神器の一たる寶劍と共に遷祭し奉り皇女豐鋤入姫命を御杖代として奉侍せしめられた。これが皇居と神宮と別れた始めて齋内親王奉仕の起原である。

然るに別に大宮地を覓めて鎮祭し奉る様神勅があつたので、豐鋤入姫命は御神體を奉じて丹波國吉佐宮に遷し奉られたが尙皇大神の大御心に副はせられぬので、更に倭國、木の國など遷幸せられ、其御老體のため奉侍の大任に堪えさせられなくなつてからは垂仁天皇の皇女倭姫命代つて更に遷幸の途に上られ九ヶ國に亘る二十二ヶ所の行宮を御經歷、遂に、此五十鈴川上、神路山の麓の地を大宮地として永久に鎮め給ふに至つた。これ實に垂仁天皇の二十六年九月で今より一千九百二十餘年前のことである。

參 考 內宮別宮

荒祭宮 內宮正殿の後方にあつて天照大御神の荒御魂を奉齋し皇大神宮の第一別宮に坐ます大宮である恒例臨時諸祭は總て本宮と同日に行はれ勅使發遣の時は當宮にも參向あり、五月、十月の神御衣祭は、本宮と當宮に限り行はれる特例がある。

月讀宮 內宮を距る北方十餘町の度會郡四郷村北中にあつて月讀命の和御魂を奉祀してある。

月讀荒御魂宮 月讀宮と併立して月讀命の荒御魂を奉祀してある。

伊佐奈岐宮 月讀宮と併立して伊非許尊を奉祀してある。

伊佐奈彌宮 伊佐奈岐宮と併立して伊非冉尊を奉祀してある。

瀧原宮 內宮を距る西方十餘里の度會郡瀧原村野後にあつて皇大神の御魂を奉祀してある。

瀧原竝宮 瀧原宮と併立して皇大神の御魂を奉祀してある。

伊雜宮 內宮を距る東方四里の志摩國磯村上之郷にあつて皇大神の御魂を奉祀してある。

風日祈宮 內宮域内にあつて、級長津彦命、級長戸邊命を奉祀してある。神德發顯は、外宮別宮風宮と同じである。

倭姫宮 市外倉田山上にあつて倭姫命を奉祀すべく今神殿の建替中である。

倭姫命は、あらゆる御辛苦御艱難を嘗めて神宮奉齋の大功業を樹てさせられた神都開基の大恩神に坐すので、神靈奉祀の儀を神都市民より貴衆兩院に請願し採擇を得た結果、大正十年一月皇大神宮別宮として倉田山に創立さるゝに至つたのである。

社殿の構造

附録『神社建築』にのこたる神明造参照。

式年遷宮

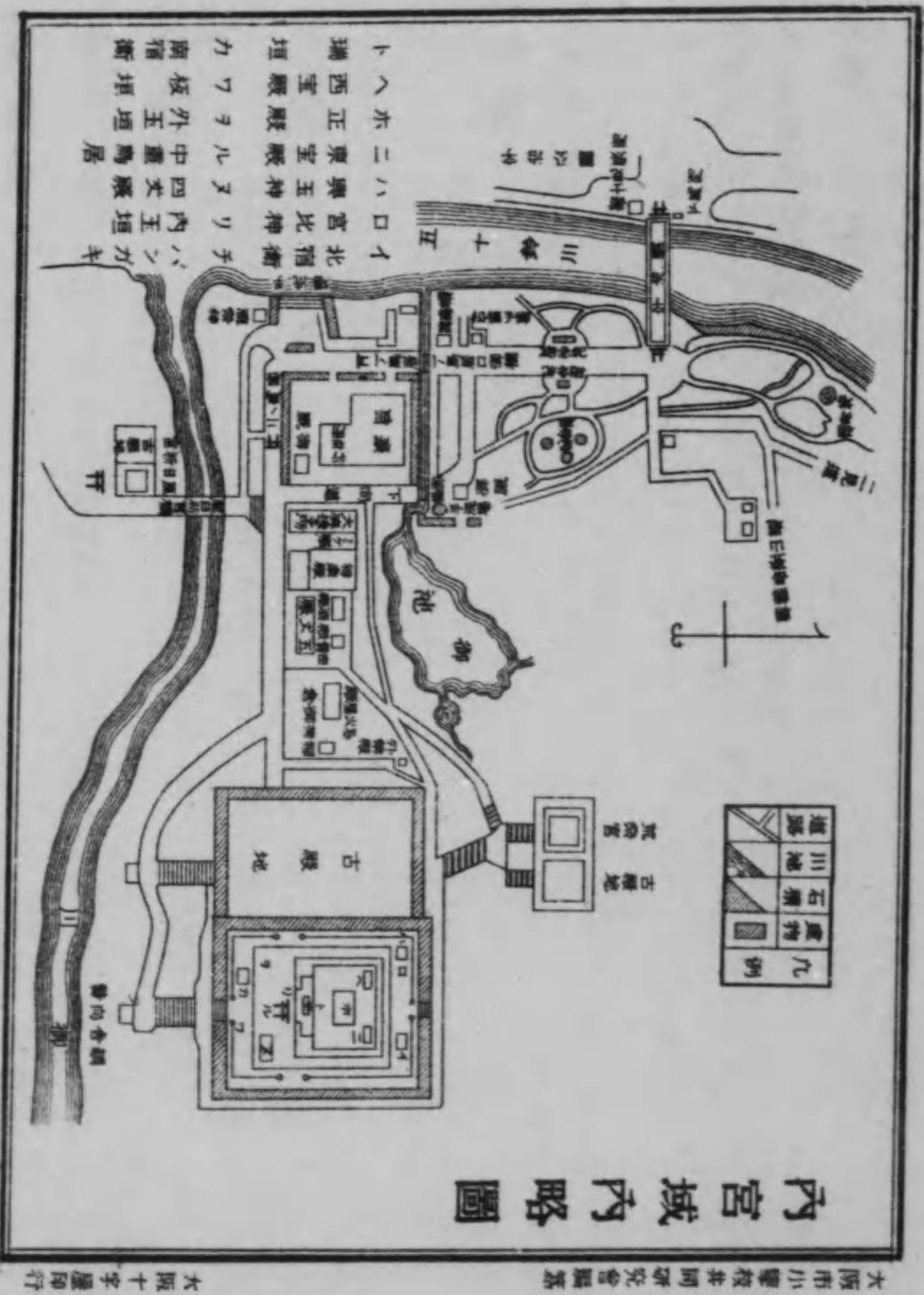
正殿以下の社殿は、二十年毎にお造り替がある。ために兩宮とも其宮地は東西二域に分れ、現に東方の宮地におまつ時は、二十年後西方の宮地に新殿を造り、成るに臨みこゝに遷御し奉る。これを式年遷宮と云ひ天武天皇の御代に定められし制で、神宮祭祀中最も大切なものである。遷宮には豫め造神宮使廳をして造營のことに當らしめ當日勅使をして祭文を奏せしめられ主上親しく遙拜し給ふは古來の例である。

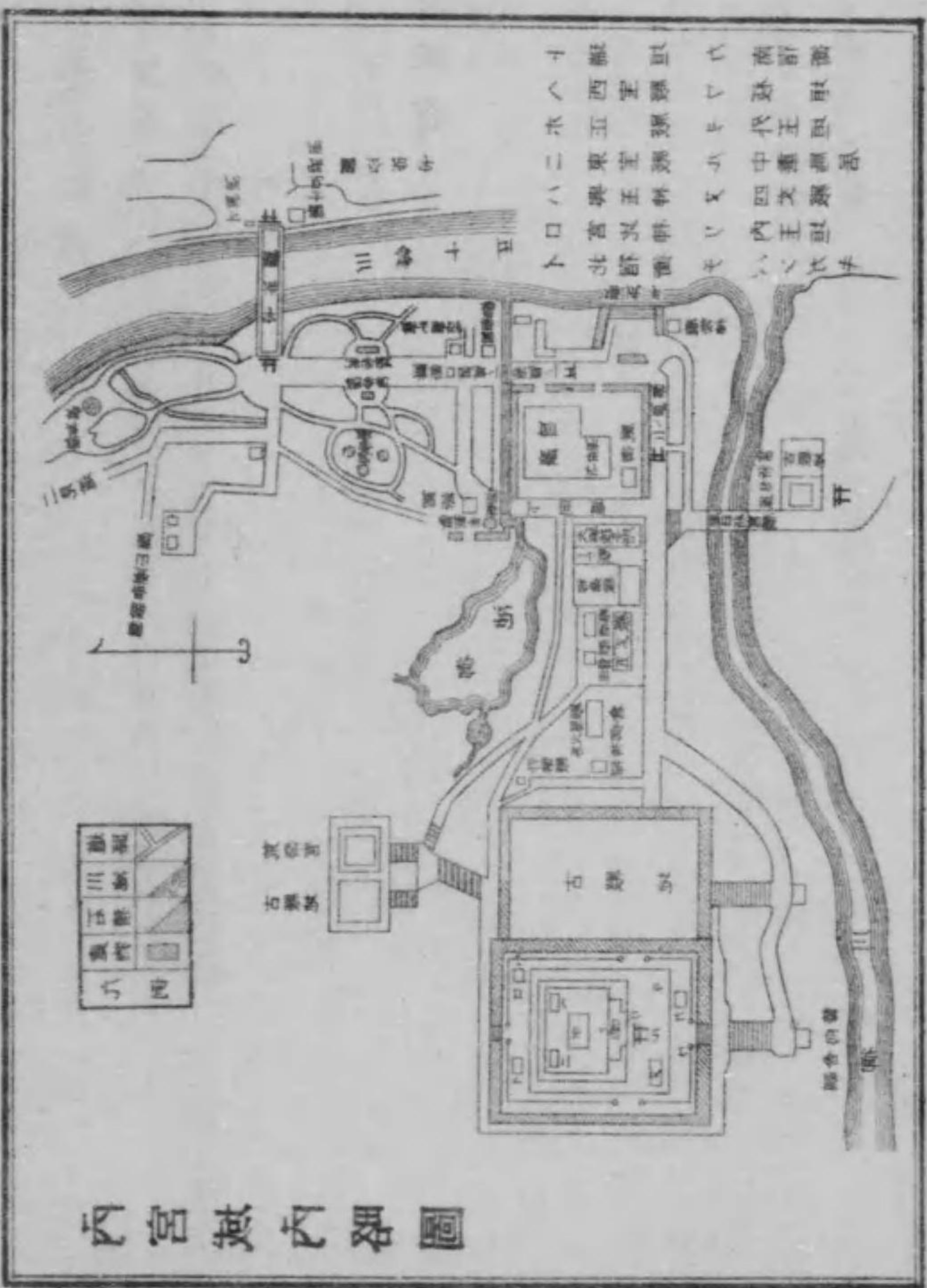
天武天皇の御代以來内宮は六十二回外宮は五十八回の式年遷宮を行はれ、大正十一年の臨時遷宮に至りて、八十回の臨時假殿遷宮を行はせられた。

奉仕の職員

垂仁天皇の御代倭姫以來、歴代皇女の未だ嫁し給はざる方を差し遣して神勤の任に當らしめられた。所謂齋宮^{イソギノミヤ}これであるが、後醍醐天皇の御代に至り世上の事變と共に永く廢絶に歸してゐた。維新後、祭主を置き天皇の御名代として皇族を以て祭事に當らしめらるゝことになつた。所謂大御手代で、祭主の下には大宮司、小宮司などの諸員ありて他の神社に類例を見ない。

職員





大正十二年神宮省編纂 大正十一年編纂

- | | |
|-----------------|-------------|
| 神宮主 (親任) 一人 | 大宮司 (勅任) 一人 |
| 少宮司 (勅任又ハ奏任) 一人 | 稱宣 (奏任) 十人 |
| 權稱宣 (判任) 二〇人 | 宮掌 (判任) 四〇人 |
| 伶人 (判任) 一四人 | 技師 (奏任) 二人 |
| 技手 (判任) 一〇人 | 囃託員及雇員 六〇人 |

内宮神苑

外宮神苑と同じく明治二十二年元神苑會の造成して二十六年神宮に献納したところで反別二町八反六畝歩を有し苑内に今上陛下御手植松及征清征露記念砲、日本海軍捷記念砲身塔がある神路山を背景として五十鈴川に臨んだ苑地の大自然美を彩飾する櫻花煥發の春光 紅葉映照の秋色は言ふまでもなく満山の新緑が初夏の大氣に匂ふ絶景は他に求め得られぬ仙實である。

如雪園

内宮神苑の西方御幸通りに面した一高地を占め、全面積一萬三千餘坪、廣大なる休憩所接待所

伊勢大廟方面

瀟洒たる貴賓室等を設けて、或は貴賓を奉迎し、或は朝野の名士を歡待し、或は神宮參拜の學生軍人青年團員及各種團體を接遇し、又は講演會を開き、或は夏季林間學舎を開設して、着實にして意義ある社會奉仕に最善の努力を捧げてをる。

本園の經營者帶谷傳三郎は大阪北濱の人で、思想界の現狀に鑑み、敬神崇祖、忠君愛國の精神涵養の急務を力説し、其素志貫徹のためには巨額の資を提供することを惜しまない稀に見る高風の士である。

二見町 度會郡二見町

町は伊勢の國の東端に在り、東と南とは山を負ひ北方伊勢海に臨み松下、江、三津、莊、西、今一色、山田原の八區から成り、農を其主業としてをる。人口五六〇〇（大正十一年末現在）風光明媚なる二見ヶ浦は江區にあり。參宮客並びに海水浴客の來り遊ぶものが多い。

二見ヶ浦 立石は二見ヶ浦驛より東北十四町

二見町一帯の海濱を二見ヶ浦と稱し、南に朝熊山を負ひ、北は伊勢海を隔て、遙かに尾、參駁の翠巒を望むことが出来る。白砂青松の間旅舎軒を並べ、宇治山田市から東々北二里十三町電車及汽車の便がある。

立石崎には興玉神社があり、又岸に近く雙岩がある。俗に之を夫婦岩と呼んで、其間に旭日を迎ふる偉觀は亦天下の絶景である。殊に風靜かに波穩かなる曉、富士の靈峯雲際に現れ、さし昇る旭の光海上にたゞよふや、萬丈の金蛇彷彿として目を眩し、其壯觀眞に言語に絶するものがある。されば特に元日の旭日を拜せんとて集り來るもの甚だ多い。

參考

立石（俗稱夫婦岩）

大なるもの 高さ 二丈九尺 周二十二間

小なるもの 同 一丈二尺 同 五間

兩岩の巨離 三間 餘

成 因 太平洋の激浪によつて海岸の浸蝕。

日の出と富士

夫婦岩の間から旭の光を拜することの出来るのは太陽の最も北偏せる夏至前後だけである。

富士は二見の東北凡五十里を隔てた彼方にあるため餘程天氣まんがよくなければ望み見ることが出来ぬ四時時を選ばないが風靜かに波穩かな曉、岩戸附近から夫婦岩を直視した線上に見ることが出来る。

附近の地質

伊勢大廟方面

二見町附近の丘陵及海岸の地質は秩父古生層下部に屬し、立石は輝石層である。而して純白色の石灰岩薄層を挿入し、其石灰石に密接せる部分は石灰質を帯び且多量の藍青石を含有せるものである。外觀は御影石の如く塊狀でなく、根武川石の如く板狀でもなく、秩父青石の如く剝狀を呈し、且綠泥質物を夾雜するために和歌の浦附近の綠泥片岩に類似してゐる。

二見興玉神社 二見ヶ浦立石崎

祭神 猿田彦大神及宇迦能御魂神

興玉社は其始め海中なる興玉神の靈石を敬祭し、立石の前に遙拜所を設けたのみであつたが天平年中僧行基が此の地に來て、興玉神の本地無跡なりとて江寺を創建し、觀世音を本尊として興玉神を鎮守神として祭祀したが、其後神縁舊に復し立石崎に御鎮座ありしを、近年宇迦能御魂神を祀れる三宮神社に合祀し二見興玉神社と稱することになつた。

朝熊山 度會郡四郷村「參考」登山路參照

山は伊勢の國の東南部に在る。山嶺は南北に延び、北は海に没して神崎となり、南は崛起して最高峯の朝熊山となり、勢、志兩國の分水界となしてをる。抽海五五三米に過ぎざれども、

脚下に伊勢海を湛え、變化に富む勢志の山河はもとより、遠く富岳をはじめとして十八州の山河を一眸の内に收める雄大な眺望、眞に海内無双の稱がある。

山上には名利金剛證寺があり、又近時朝熊公園も設けられるが、登山道が稍困難なために一般人士から顧みられないのは遺憾である。計畫中の登山鐵道成るの日には參宮客をよるこぼせるもの遙に二見鳥羽の上にあるだらう。

とうふや 度會郡四郷村朝熊

現在山上に於ける只た一つの旅館である。表登山口と裏登山口との集合點朝熊峠に在る。山上の勝地で客室の設備も整つてをる。眺望極めて廣く一に十八州亭の名がある。天氣晴朗の日庭前の大望遠鏡を覗けば東海、東山、北陸へかけて十八州の山河を望むことが出来るといはれてをる。パノラマの様に展開する山海をながめ恍惚自失眞に心身遊離の感がある。

金剛證寺 度會郡四郷村

宗派、臨濟宗

本尊、虚空藏菩薩

伊勢大廟方面

欽明天皇の朝に僧教待開創し、其後弘法大師之れを中興し、元中七年（約五百四十年前）僧東岳來住し大いに堂宇の復興につとめたが、爾後數々回祿の災に遇ひ今摩尼殿其他數字を止むるに過ぎないが、尙堂塔の壯嚴勢陽第一の稱がある。吞海庵前の富士見臺は東海の十三州を展望し、且昇陽の壯觀を瞰下し得る勝地である。

參考

登山路

表口、（とうふやへ五十町、金剛證寺へ六十町）
内宮神苑宇治橋東詰から登るもので、十六町の峻阪を登りつめると楠部峠の茶店に出る。こゝで楠部村からの登山路（拾六町）に出合ふ。これからさきは峰傳ひで道は樂だ、十四町行くと一字田峠の茶店につく、こゝから又廿町登るととうふやにつく、これから心持下り道十町で金剛證寺に至る。吞海庵迄三町裏口、（とうふやまで八十町）
二見から五十八町の亘道（人力車を通ず）を進めば山下の朝熊村につく。こゝから峻阪廿二町でとふやに至る。

十八州の山河

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|-----|-----|------|-----|-----|------|------|------|------|------|-----|-----|-----|-----|
| (17) | (15) | (13) | (11) | (6) | (7) | (5) | (3) | (1) | (18) | (16) | (14) | (12) | (10) | (8) | (6) | (4) | (2) |
| 越中 | 信州 | 美濃 | 相州 | 甲州 | 遠州 | 尾州 | 和州 | 志州 | 越後 | 加賀 | 飛彈 | 江州 | 伊豆 | 駿州 | 三州 | 伊賀 | 勢州 |
| 中立山 | 淺間山 | 油坂峠 | 愛鷹山 | 八ヶ岳 | 秋葉山 | 知多半島 | 高見山 | の山海 | 妙高山 | 白山 | 乗鞍岳 | 伊吹山 | 下田 | 富士山 | 眞湖崎 | 布引山 | の山河 |

鳥羽町 三重縣志摩郡

町は伊勢灣の口に在り、答志菅坂手等の諸島其前を擁し安穩な錨地を作つて居る。海運が帆

船を主とした時には、大阪東京間の風待、風避には伊豆下田と並び稱せられた良港で船舶の出入が絶へなかつたが、交通運輸の諸機關の發達した今日では其の面影もみとむることは出来なくなつた。近年鐵道開通以來自然の佳景を賞するために來り遊ぶものが多い。

参考 町の現勢

人口—約、八千(大正十一年末現在)

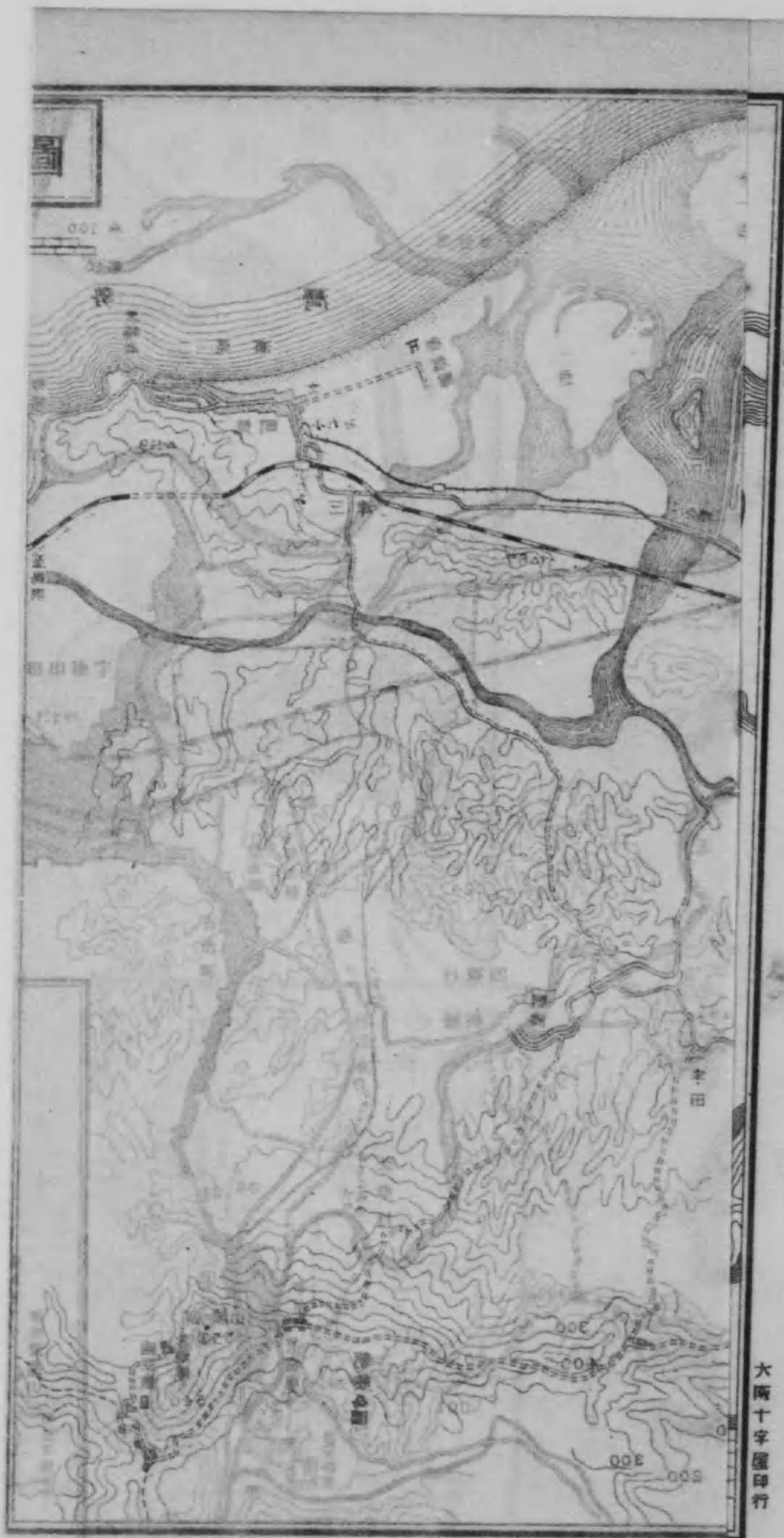
鳥羽昇降人員—昇降各約五十萬人(大正十年調)

日和山 鳥羽驛の西北四町

海拔僅かに六十八米に過ぎざるも、鳥羽灣上に聳立せるを以て眼界は極めて濶く、坂手、菅桃取答志神島の諸島を白帆青松の間に眺め、遙かに伊勢灣を隔てて尾州知多半島、三河伊良湖岬と相對し、然も秋晴の日、遠く富士及甲駿の峻嶺を望むことが出来る。風光實に奥州松島に比すべきものがある。

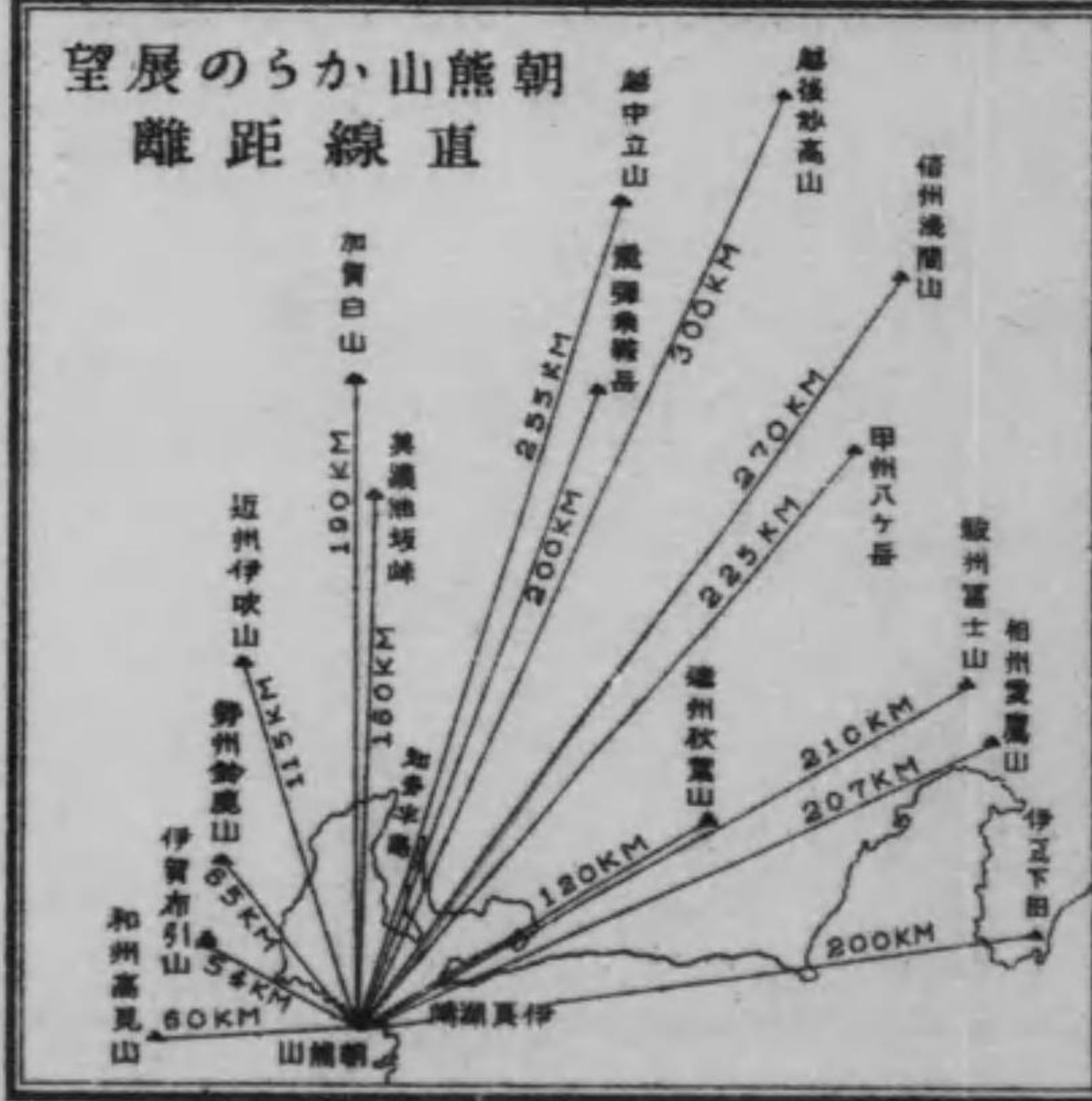
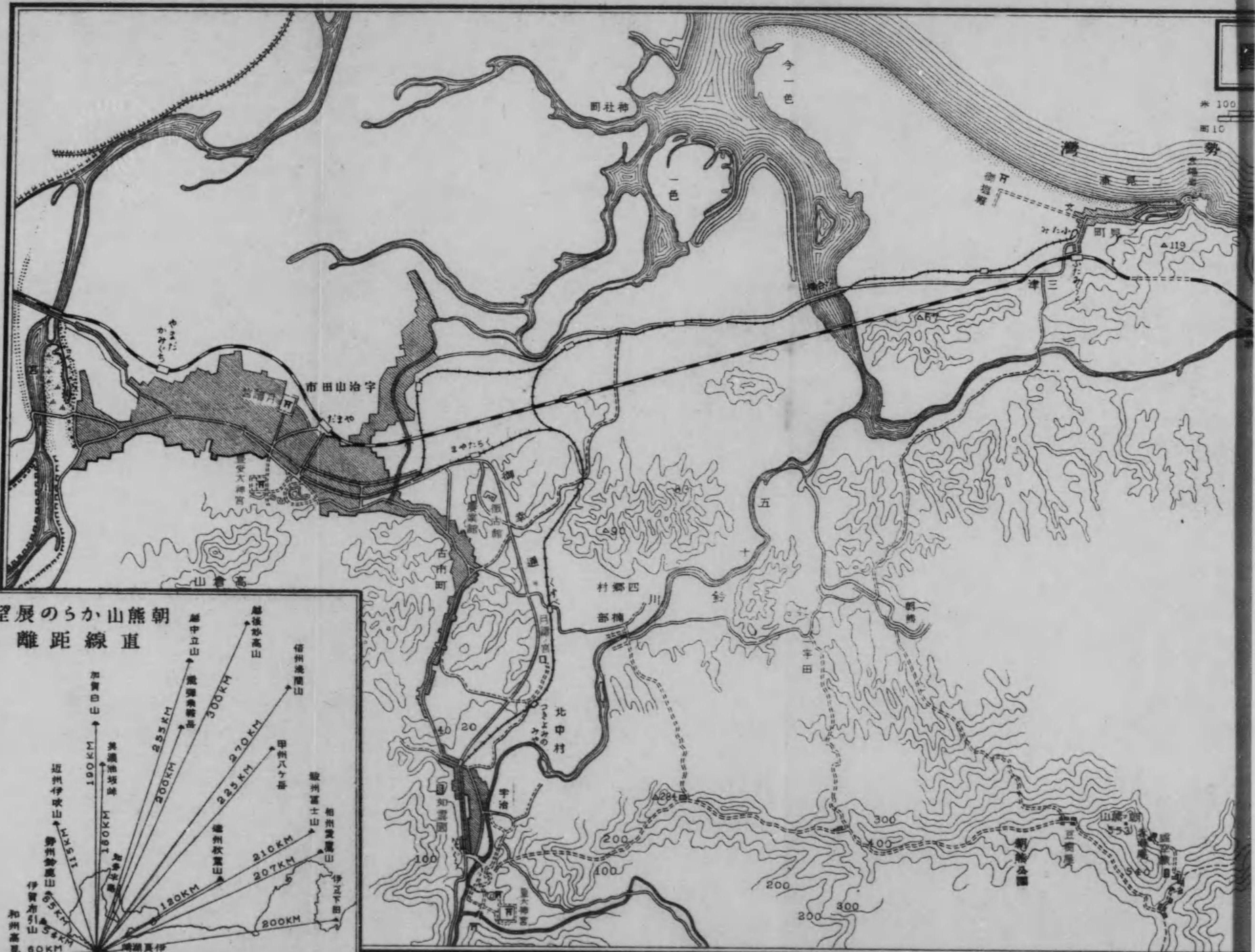
今山上に無線電話があり、中腹に燈臺がある。

参考



大府市小學校共同研究會編寫

大府十字屋印行





大洲市中華共同協安會編

日和山の由来

其昔、東海轉漕の舟は熊野浦より此に至り、更に七十里の長灘を経て豆州下田港に入った。其間繫泊の便所がない。故に鳥羽に至る時、善く陰晴、險易を豫定して後解纜せればならなかつた。従つて舟人多く展望の潤い此の丘に登り天象を察し、海洋の遲速を議した。茲に日和山の名が起つた。

鳥羽無線電話

日和山展望所の西に百五十尺の電柱が聳えてゐるのが鳥羽無線電話で海上四里の初島からの船舶通過報は此所を経て直ちに名古屋、四日市等の關係業者に通報せられ、一刻を争ふ荷物を敏捷に處理すべき手配りをするを目的として、大正三年以來名古屋商業會議所經營の専用設備であつたが、近年遞信省の所管となり、答志、初島兩島郵便局鳥羽間の通常電話をも取扱ふこととなつて一般通信上に便宜を興へるに至つた。

鳥羽港導燈

鳥羽驛に近く日和山の中腹に在る。菅島水道通過船舶の航行に便せんため明治四十五年建設されたもので燈光は十一海里に達する。

鳥羽城址 驛の南五町

城址は町の中央に在つて、西南北の三方は市街之をかこみ、東は脚下に鳥羽灣の碧海に臨む伊勢大廟方面

要塞の地で四圍の展望も亦極めてよいが、今は全く見る影もない廢墟と化し終つてをる。

樋の山遊園 驛の西南七町

町の西方に在り、土地高燥、眺望雄大、四季絶好の遊園地である。

參 考

鳥羽町の觀光地

本町の觀光地として遊覽客の脚を引くところは、日和山、城址、樋の山の三ヶ所が主要なものであるが、皆何れも海上の見晴らしを唯一の目的とした場所、變化に乏しい恨みがある。中でも日和山は驛にも近く附近の情趣にも最も變化に富んでゐるが、稍所狭いのは玉に疵か。

沿 線

月 ヶ 瀬

奈良縣添上郡月瀬村(鳥ヶ原驛の西南二里半) (「參考」順路參照)

天下の梅齋

月ヶ瀬は、大和、伊賀、山城三國の交界に近く、名張川の流に沿へる梅花の名所である。

月瀬村には石打、尾山、長引、桃香野、月瀬の五大字がある。外に波多野河(大和國山邊郡)嵩、湍瀬

廣瀬、花垣村(伊賀國名賀郡)白檉、治田の十個の大字、即舊十ヶ村が月瀬の勝區である。

文政年中(約一〇〇年前)津藩の儒者齋藤拙堂此地に遊び梅齋遊記を著し、谿山花月の勝景を激賞せしより、其名海内に傳稱し、文士墨客の節を曳くもの日々多きを加へた。

梅齋の衰微

此地は元、乾梅子を晒して烏梅と爲し之れを染工に賣いた。京都西陣は其主要なる仕向地であつた。近年アニリン染料之に代り、又、昔日の需要を見ざるに至つた。然るに本地の梅は染料採取に適する特殊種に屬し、核は比較的大きく、且酸味強烈なるため、染料としての需要を失つた曉は、即ち梅林の生命の絶ゆる時であつた。茲に有志相謀り食用種に替へんことを企て、接穂を他に求めて、何年かの計畫を立てて、實行に着手したがそれは全く失敗に終つた。數十年を経た老木は接木の臺として新しい生命を盛り返さないで年々枯死してしまつたから。

保 勝 會

明治十四、五年迄は三十五町歩の反別をもつた梅林は、今や其三分の一にも満たない十一町歩餘に減じた。然れども脚下に碧潭岩をかみ、三國岳の雄姿を雲烟の間に遠望する尾山の壯觀。切り拓られて層々重なる山畑、藪のかけ、森の中から隠見する村落の、月ヶ瀬橋を隔て、展開する天神山からの眺め。此

伊勢大廟方面

の水。此の山。眞の月ヶ瀬の景勝は只梅林のみに止らない。且近年保勝會を組織し、年々數百株の種苗を植栽し、ひたすら復舊につとめ、殊に昨大正十一年には史蹟名勝天然記念物保護法により保護さるゝこととなつた。再び昔の梅谿を見るのも遠いことではあるまい。

梅谿遊記の一節

何^{レノ}地^カ無^ラ梅^{ラン}。何^{レノ}郷^{カラ}無^シ山水^{シヤ}。唯和州梅谿。花挾^{シテ}山水^マ而^{シテ}奇^シ。山水得^テ花^ヲ而^{シテ}麗^シ。爲^リ天下絶勝。(中略)

危峰層巖、錯立^シ其間^ニ。梅爲^リ之^レ經^ト而^{シテ}松爲^リ之^レ緯^ト。水竹點綴^ス之^レ。(中略)

余嘗遊^ビ芳野^ニ。觀^ル其^ノ一目千本^ヲ。有^リ此盛^ニ而^シ無^シ此勝^ニ。又嘗觀^ル嵐山櫻花^ヲ。有^リ此勝^ニ而^シ無^シ此盛^ニ也。(後略)

順路

- 一、上野からするもの——東西四里
- 二、島ヶ原からするもの——西南二里半
- 三、笠置からするもの——南東三里半

上野からのものは最も遠いが、人力車、自動車の便もあるから、足の弱い人にも行ける。其他からは近

上野

町 伊賀國阿山郡。伊賀上野驛の南三十町。伊賀輕鐵の便あり

伊賀盆地の中心

くばあるか、交通機關が缺けてるから、足の達者な人に適するだらう。梅谿は東から西の端迄一里餘に亘るから大阪方面へ歸る健脚家は、桃香野から笠置へ出る方が變化があつて面白い。殊に島ヶ原へは上野になるが、笠置へは降りになり、且、道に劍客を出した柳生の古蹟も尋ねられるから。

伊賀盆地

伊勢海、奈良盆地、瀬戸内海等と同じ原因で陥没した土地で、殘壘、笠置山脈、鈴鹿山脈に圍まれ、木津川が其排水口である。小分して上野、名張、平田等の小盆地となつて、上野盆地は最も廣く、海拔百四十米に過ぎない。

伊賀越敵討

備前岡山の城主、松平宮内少輔忠雄の家士河合又五郎、事を以て同藩の士渡邊源太夫を殺害して江戸に伊勢大廟方面

逃れた。源太夫の兄數馬は姉婿に當る大和郡山の城主。本田甲斐守の劍法師範。荒木又右衛門と共に又五郎の行方を尋ねたが容易に分らなかつた。寛永十一年十一月(約二百九十年前)遂に伊賀城下鍵屋の辻で出合つて之を斃した。伊賀越の敵討といつて今も尙人口に膾炙してゐる。

五 瀧 村 三重縣阿山郡玉瀧村(島ヶ原驛東北二里二十二町)

玉瀧村は山間の一小村で、農耕を主業とし、養蠶・養鶏・製茶等を副業として、村民各々忠實に自己の業務に服し、教育・衛生等の事業も整然として其成果見べきものがある。又青年團處女會等の團體も學校及村役場を中心として修養にいそしむのみならず、進んで公共事業に盡してゐる、斯くして全村民が協同一致、村の發展に努むる有様は誠に天下の樂園である。

村への順路

佐那具驛から——二里二十二町

柘植驛から——二里二十三町

深津線深川驛から——一里三十町

柘 植 伊賀國阿山郡

柘植驛は草津線への分岐點で、海拔二二五米に在る。俳人芭蕉の生地は南西廿三町に在る。

參 考 松尾芭蕉

正保元年(約二百八十年前)伊賀國阿山郡柘植村に生れた。九才の時伊賀上野城主藤堂氏に仕へ、嫡子其忠の小扈從を勤めた。其忠俳諧を好み北村季吟に師事した。芭蕉は其感化を受けて俳諧を志した。其忠の死後京都に出て、季吟の門に入り、後西國を遊歴し、次で江戸に出て深川に居を卜し、門戸を立て、子弟を教へた。後好んで四方を遊歴し至る所に句があつた。

元禄七年會々大阪に遊び園女の饗應を受けて胃腸を害し、御堂前花屋仁左衛門方の裏座敷を借りて臥した、十月九日

旅に病んで夢は枯野を駆け廻る

と吟じたのは彼が最後の句で、十二日觀音經を誦しつゝ眠るが如く逝いた。年五十一、江州義仲寺に葬つた。

名高き句に

古池や蛙飛びこむ水の音

荒海や佐渡に横たふ天の川

加 太

伊勢大廟方面

伊勢大廟方面

四六四

木津川に沿ふて漸次に登つた汽車は柘植のあたりから益々登つて、加太のトンネルにはいる、海拔將に三百二十米。

關

伊勢國鈴鹿郡關町

町は鈴鹿川畔、鈴鹿山脈の隘路に位し、東海道本道は鈴鹿峠に通じ、伊賀路は加太越に出で、兩線は此所に會合し、又參宮路の分岐點である。誠に要害の地なるを以て上古は此所に關門を設けた。關址は今明かでないが、地名はこれに因んだものである。町に有名なる地藏堂がある。

參考

鈴鹿の關

奈良都の初めに鈴鹿山道の固めに設けられたもので、愛發(越前)不破(美濃)と共に三關の一と稱せられた。

關の地藏(九關山寶藏寺、停車場の北西四町)

宗派、古義眞言宗御室派

本尊、地藏菩薩

沿革、聖武天皇の天平十三年(約一〇〇年)前行基の創立と傳へる。後火災に罹つたが、本尊は其厄を免れた。文明四年に再建して一休和尚が開眼した。現在の建物は元祿年中(約二三〇年前)の造營である。本尊は殊に大なるを以て世に聞え、奈良の大佛に比するに至つた。

關の地藏に振袖着せて

奈良の大佛むにとれ (俗語)

鈴鹿峠

峠は關の西北二里に在る。標高三七三米。古來箱根と相伯仲し、東海道第二の難所とせられた。途中坂下附近には所謂筆捨山がある。全山岩石を以て疊成せる如く、古松其間に生じ、景趣捨て難きものがある。俗説に昔、狩野法眼元信此風景を寫す能はず、筆をすて、歎じたるより此名ありと傳へる。

關から汽車を離れて此峠を越え、土山を経て水口に至る昔の街道の草鞋旅は、秋季紅葉の季節に最も興趣多いものである。

龜山

伊勢西鈴鹿郡龜山町

鐵路關西線と參宮線との分岐點にして、昔の東海道五十三次の一驛である。

伊勢大廟方面

四六五

日本武尊を祀れる能復野神社は東北一里半に在る。

一 身田 伊勢國河藝郡一心田

驛の東三町に眞宗高田派の本山専修寺がある。

宗派、眞宗高田派

本尊、阿彌陀如来

下野の人眞壁春時、深く親鸞を歸依し、剃髮して眞佛といひ、下野高田に佛寺を創立して高田専修寺といつた。それより後八代眞惠上人に至つて中國佛法の大願を起し、一身田を本寺として本願寺と勢を競ふほどであつたが、後本願寺に附隨して門跡號を冒し、京都高貴の家より子弟を申降して寺を嗣がしめ又近年擧げて華族に列し子爵を賜ふた。寺は現時佛教信仰の中心たる本願寺よりも四十七年前に建立され、皇室の勅願所として上下の信仰極めて厚い。

津

三重縣津市

藤室侯の舊城下にして、三重縣廳の所在地である。

市の一部なる贊崎港は岩田川の吐口にあり、大阪、熱田間の航路にあたり、海上交通の便があるのみで

なく、陸には參宮線があつて、關西線と連絡し、又安濃鐵道、中勢鐵道、伊勢鐵道等は市中心として附近の交通を助け、市況極めて盛んで、實に勢州第一の都會である。

伊勢は津でもつ、津は伊勢でもつ、尾張名古屋は城にもつ (俗語)
人口五萬、阿漕焼、津源子、綿布等を産する。

參考

津城址 (津驛の東南十九町)

天正三年織田信長が、其弟信包を安濃津に置き地方を制せしめたのが本城の基因で、慶長十四年(約三二〇年前)藤堂高虎本城を領し、修造して子孫に傳へた。其封三十二萬石。

高尾は慶長、元和の際、家康の知遇を得て政に參與し、功を以て大祿を給せられ、井伊公に比せらるゝ勢となり、東國三十三州の旗頭とまで歌はるるに至り、城下は益々榮えた。

借樂公園 (津驛の西南三町)

園はもと藤堂氏の山莊で、風景佳絶、關西屈指の名園である。

阿漕ヶ浦 (津市の南端阿漕驛から北東十三町)

白砂青松相映じ風光明媚、夏季には海水浴が盛んである。浦は其昔伊勢大廟の神饌に供すべき御費の漁場として殺生禁斷の地であつた。

伊勢大廟方面

松

坂

伊勢國飯南郡松坂町

西方には丘陵を負ひ、前方に伊勢平野が開け、東北一里には大口港を控へた南伊勢第一の都邑で、附近には松坂編を多く産する。

町は國學者本居宣長の出生地、今尙居室があり、又、市の西南一里三十町花岡村山室、妙樂寺には翁の墓がある。

参考

本居宣長

徳川時代に於ける國學者の泰斗で、契沖、春滿以來の學風を振興し、國學研究上に一時期を劃した偉人である、其事業の中心は我が國の古典たる古事記の註釋であつた。

常に讀書を好み、殊に加茂真淵の著書によつて啓發されることが多かつた。年三十四才、偶々真淵翁旅行の途次松坂に止宿せしを尋ねて感ずるところあり、之に師事し、努力三十五年、遂に古事記傳四十八卷を著した。考證解義共に詳密で、博引旁證盡さざるなく、具さに諸説の異同を辯じ、これを基礎として自家の結論に達するところ、論據明瞭、識見卓拔、契沖の萬葉代匠記と並べて古典研究の最大著述と稱せられてゐる。

明治卅八年從三位に陞叙された。世に鈴屋翁といふのは、書齋に三十六の鈴をかけて、自ら鈴の屋と稱したからである。

敷島の大和心を人間はゞ、朝日にはふ山櫻花。
の歌は翁の詠で、普く人口に膾炙してゐる。

伊勢方面
記用書事

百科大辭典、地名辭書、二見名勝誌、烏羽町勢要覽、
神宮沿革及附近の名所舊蹟案内（杉木齋之助氏）大日
本地理集成

附 録

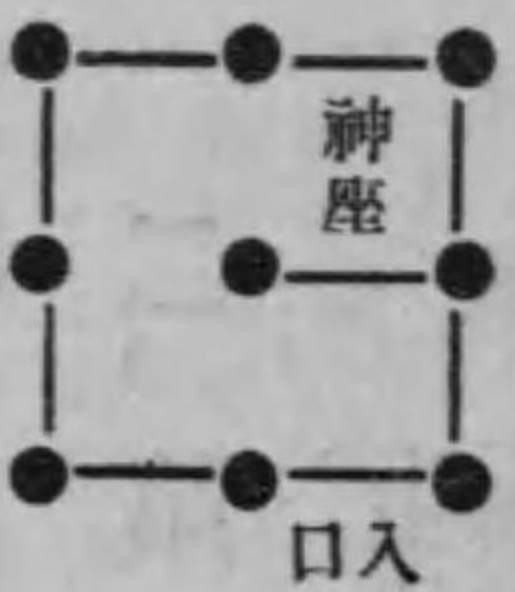
神 社 建 築

日本百科大辭典第五卷九九〇頁挿繪參照

一、獨 創 時 代 (搖籃時代)に生じたるもの

大 社 造 (出雲大社)

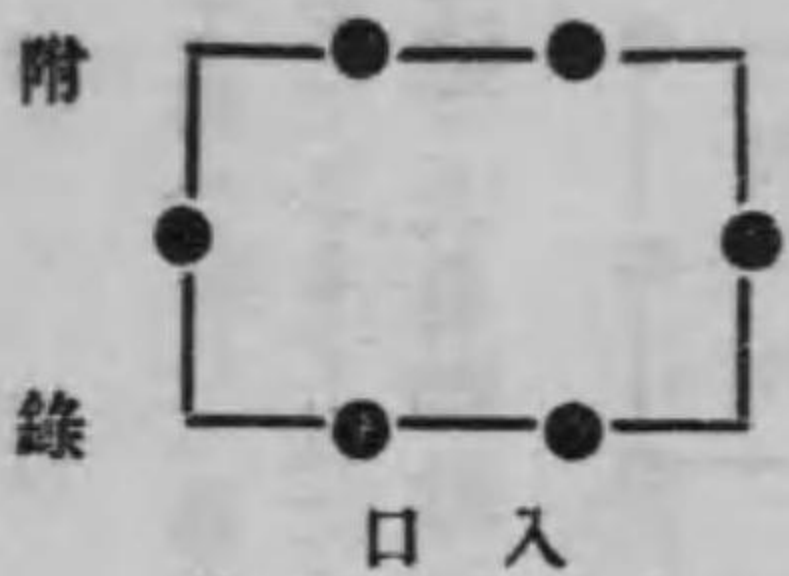
大古は、神を祀る所は、宮殿又は住宅の一部分であつて、獨立した神社はなかつた。出雲大社の平面はよく其傳を傳へてゐる、即ち方二間(建築上の術語で、實際の長さに拘らず柱間一つを一間といふ)で、中央に太い圓柱があり、入口は右方一間とし、中央の柱との間を仕切つて奥に神座がある。(この入口から神座までの間に人が住んだのである)。此中央に柱ある



ことや、入口の偏してゐる事は如何にも原始的である。住宅と神社とを兼ねた建築は、今では神社建築の最初の様式、同時に日本建築の最初の様式となつてゐる。

特色 一、掘立柱なるを、(勿論圓柱で始は皮の儘用ひた) 二、屋根は茅葺で、千木(天地根元造に於て、交錯した丸太の上部) 堅緒木(葉や茅の飛ばないやうに抑へた丸太)のあること 三、壁も床も板張りなること 四、屋根の形が切妻造で妻入り(入口が妻の方についてゐる)なること 五、曲線の部分なきこと 六、色彩の裝飾を施さないこと(但し現在の大社は柱に礎石を用ひ千木は構造から離れて別につき、屋根に曲線が入つてゐる)。

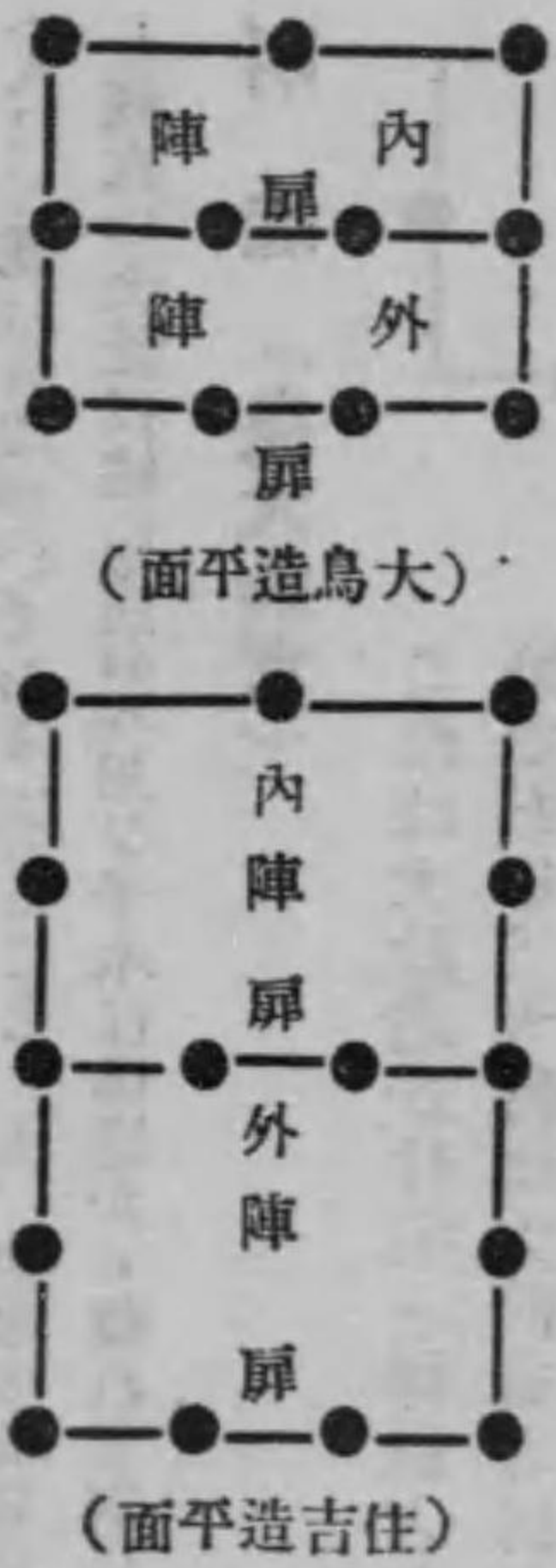
神 明 造 (皇大神宮)



これは大社造が住宅と神社とを兼ねてゐるのとは異り獨立した神社建築である。大體は大社造と同じく掘立柱、茅葺、壁と床は板張、曲線なく彩色も用ひない。たゞ異るところは、平入り(入口が妻の方でない)に、屋根を葺き下した方についてゐる)であること、中央に柱のないこと破風の下に棟持柱のある事である。現在の内宮外宮は、二十年毎

に建て換へられてゐるが、其形式は最初の通りで、唯材料がよくなり技術が進み裝飾が附加はつた丈である。殊に千木の如きは今も下からつきぬけ構造上の意味を持つてゐる。

大鳥造(大鳥神社)と住吉造(住吉神社)



其他の點は、大體、大社造と異るところがない。

大社造の中央の柱がとれ、偏つた入口が正面につき一間二面の平面となり前後に分れて前を外陣、後を内陣とする一形式を大鳥造と云ひ、更に其内外陣を廣くしたものは住吉造である。

一、第一次模倣時代(朝鮮及唐を模倣した)に至りて生じたるもの

春日造(春日神社)

住吉造の社殿の前に向拜(神社の前に張り出した部分で、參詣人の禮拜するところ)を附加し向拜の廂屋根を本宇の屋根に連結し、屋根の流を曲線形となしたるものを春日造とよんでゐる春日神社は此好標本で、これの創設に際し、はじめて丹塗を施した。これは佛教建築の影響で建築上の神佛融合である。また、此時代から神社建築の輪廓に曲線を見るやうになつた。

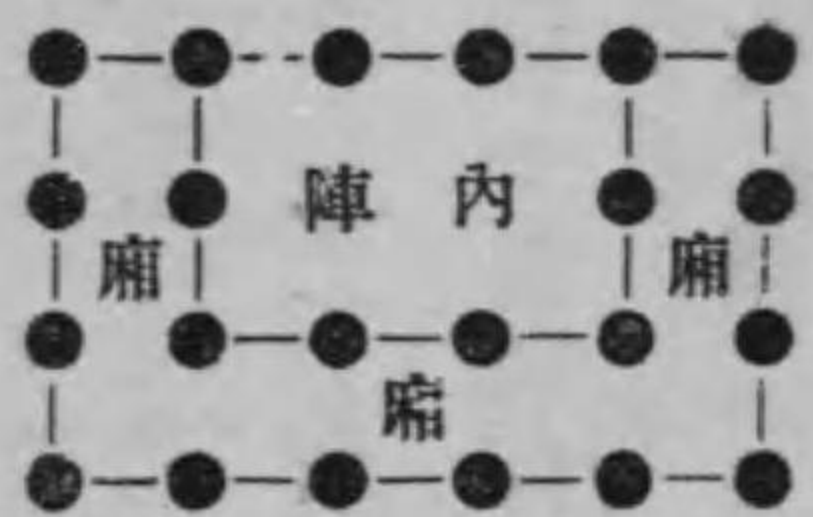
流造(稻荷神社)

神明造の社殿の前に向拜をつけ、向拜の廂屋根と本宇の切妻屋根とを連続せしめて凹曲線の輪廓を成せるもの(従つて側面の形は、左右圓形にあらずして、前の流れは長く、後の流れは短し)を流造とよんでゐる。

二、第一次同化時代(朝鮮唐の文明を同化した)に生じたるもの

日吉造(日吉神社)

附 録



日吉造は、佛教建築から生み出されたものである。其平面は三間二面の内陣の左右前の三方に一間の廂をめぐらしたもので、其形状は内陣の上に神明造型の屋を冠し、三方の廂に廂屋根を繞らしてある。これを前面より見れば入母屋の如く、後面より見れば前後に向拜ある春日造の如く、側面より見れば、左右均齋を失ひて入母屋の妻の一方を截断したやうである。

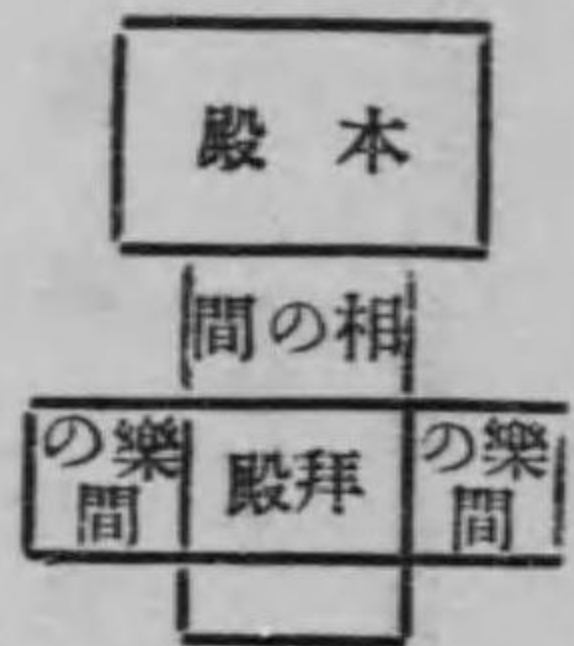
八幡造 (石清水八幡宮)

神明造型の本殿の前に流造型の拜殿を附けたやうな建築である。其中間は廊となり、廊の上には別に屋根を設けず本殿の前流れと拜殿の後流れとを利用し其間に大きな樋をかけてある。

四、第二次模倣時代 (宋元を模倣した鎌倉、室町時代) を經、第二次同化時代に至りて生ぜしもの

権現造 (北野神社)

京都の北野神社は桃山時代における神社建築の最代表的なるもので、権現造の標本である。



その形式は、本殿の前に拜殿を置き、兩者を相の間 (幣殿又は石の間とも呼ぶ) でつなぎ、拜殿の左右には樂の間を翼として附ける。従つて屋根も複雑となり棟の數も多いので、八棟造とも呼んでゐる。神社の形式としては最も發達したもので、格好もよく、手法、裝飾共に完美してゐる。

右の外祇園造、吉備津造、香稚造などあれど略する。
(主として日本美術史講話及日本百科大辭典に據る)

大正十二年九月廿五日印刷
大正十二年九月三十日發行

【定價二圓四十錢】

編纂者

大阪市小學校共同研究會

代表者

福士末之助

印刷者

大阪市西區阿波座二番町壹番地
日本印刷製本株式會社
堀越 幸

地圖印刷人

十字屋財藤勝藏
大阪市南區天王寺大道一丁目

印刷所

大阪市西區阿波座二番町壹番地
日本印刷製本株式會社



不許
複製

2636
88

終

